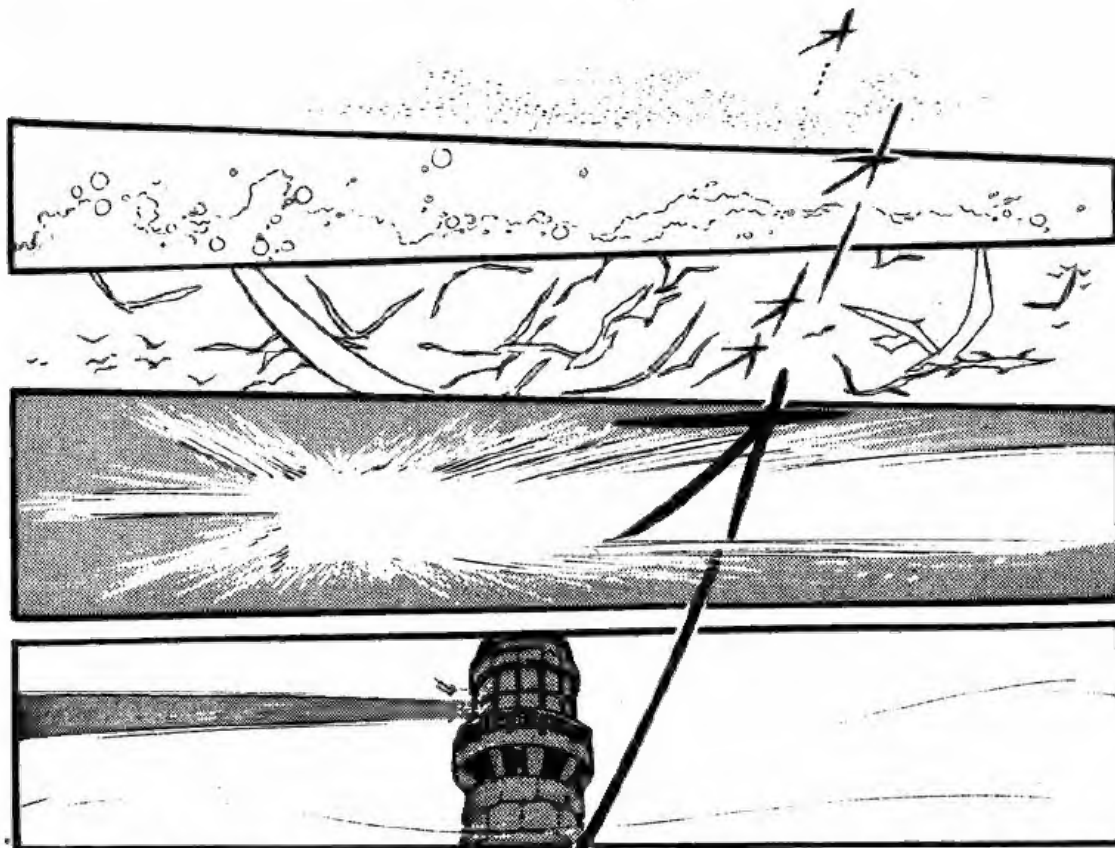
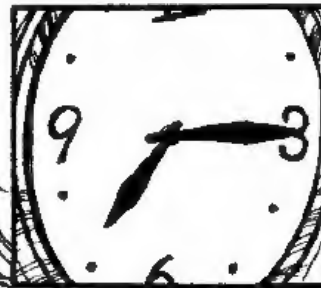


霧笛

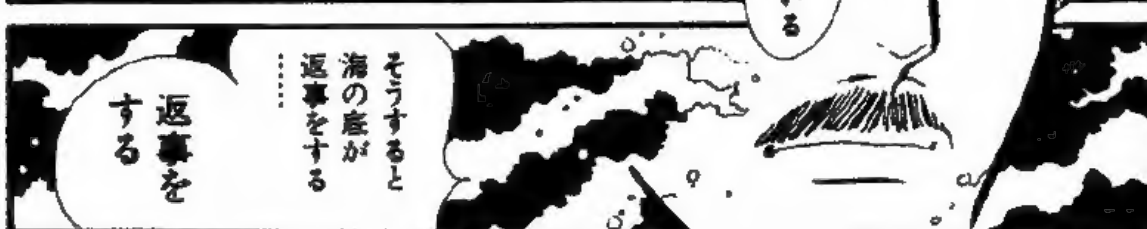
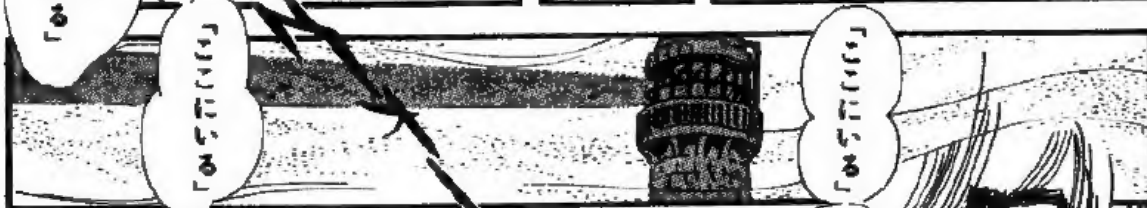
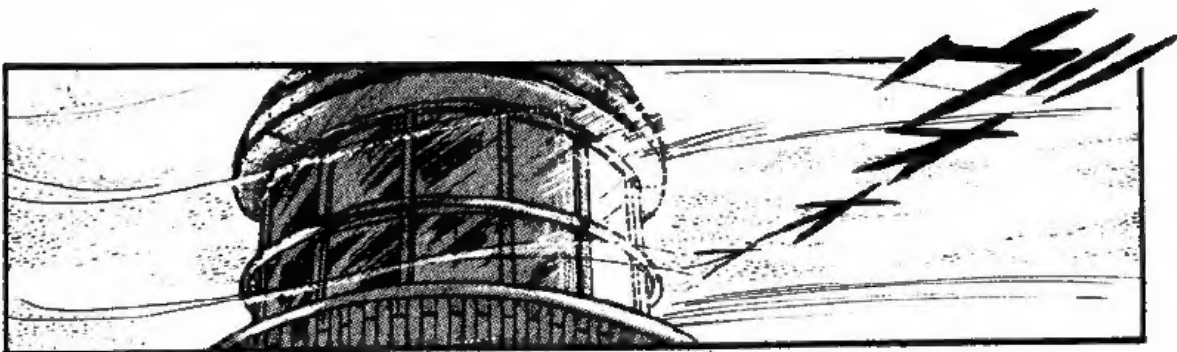
















これまでに
あった
どんな時間

どんな
夢にも

似合った声を
つくって
やろう

たとえば
夜ふけてある

きみのそばの
からっぽのベッド

訪うて
誰も人の
いない家

また
葉のちつて
しまった
晩秋の木々に

似合った...

そんな言を
つくってやろう...



鳴きながら
南方へ去る
鳥の声

11月の
風や...

さみしい浜辺に
よする波に
似た音

そんな音を
つくってやろう

それは
あまりにも
孤独な音なので
誰もそれを
聞きそらす
はずはなく

それを
耳にしては
だれもが
心ひそかに
しのび泣きをし

遠くの町で
聞けばいつそう
我家が
あたたかく
なつかしく
思われる...

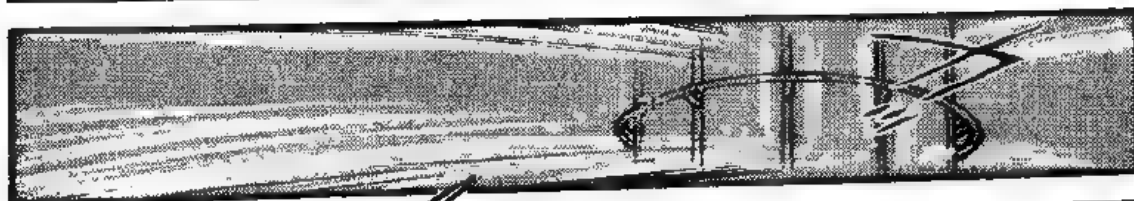
そんな音をつくって
やろう

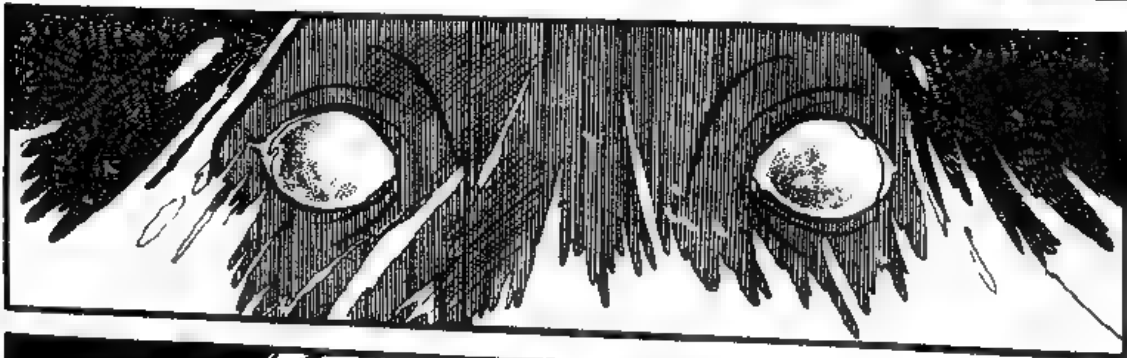
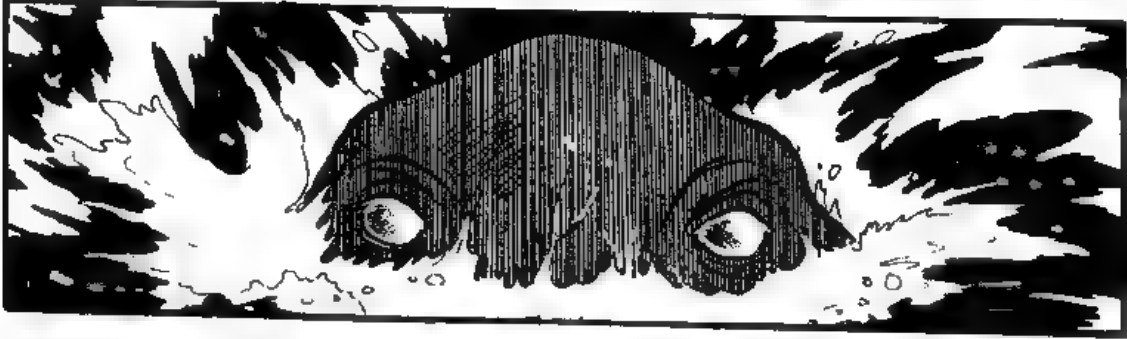
おれは
我と我身を
ひとつの音
ひとつの機械と
してやろう

そうすれば
それを人は
親苗と呼び

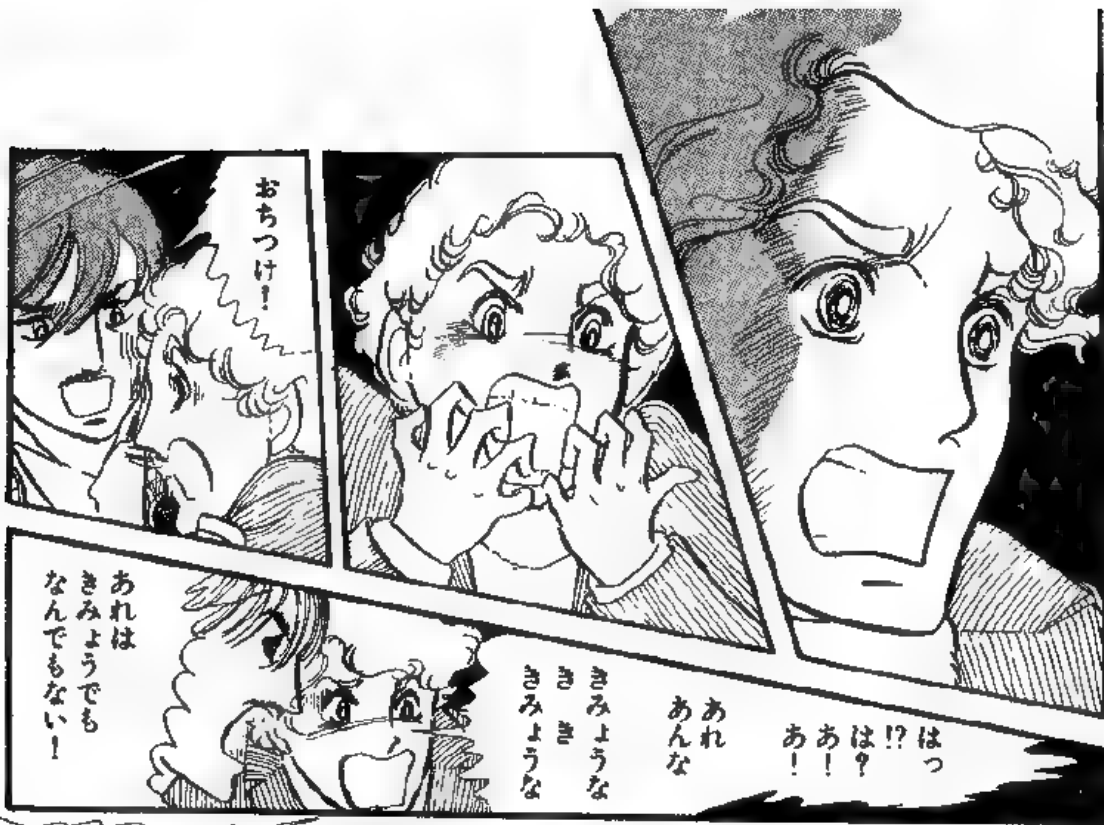


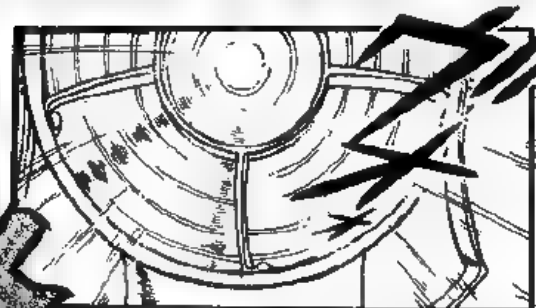
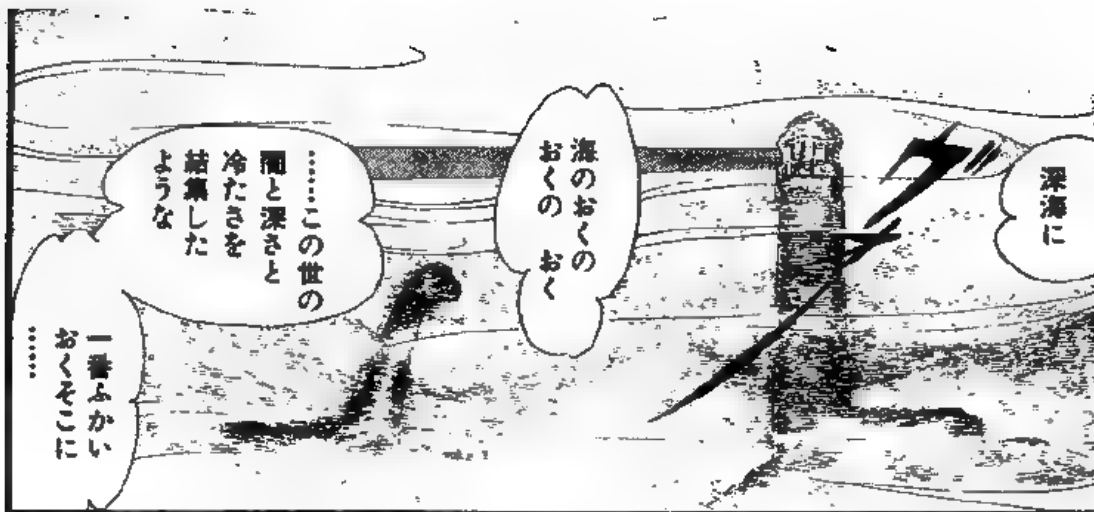




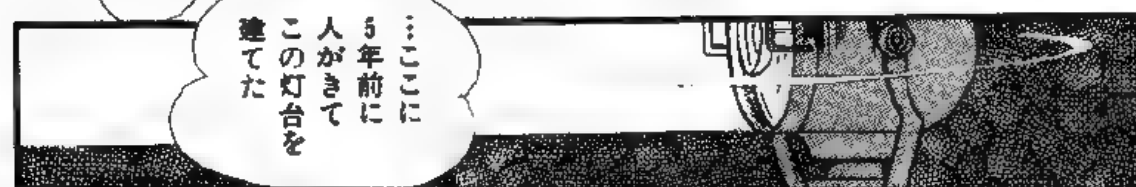


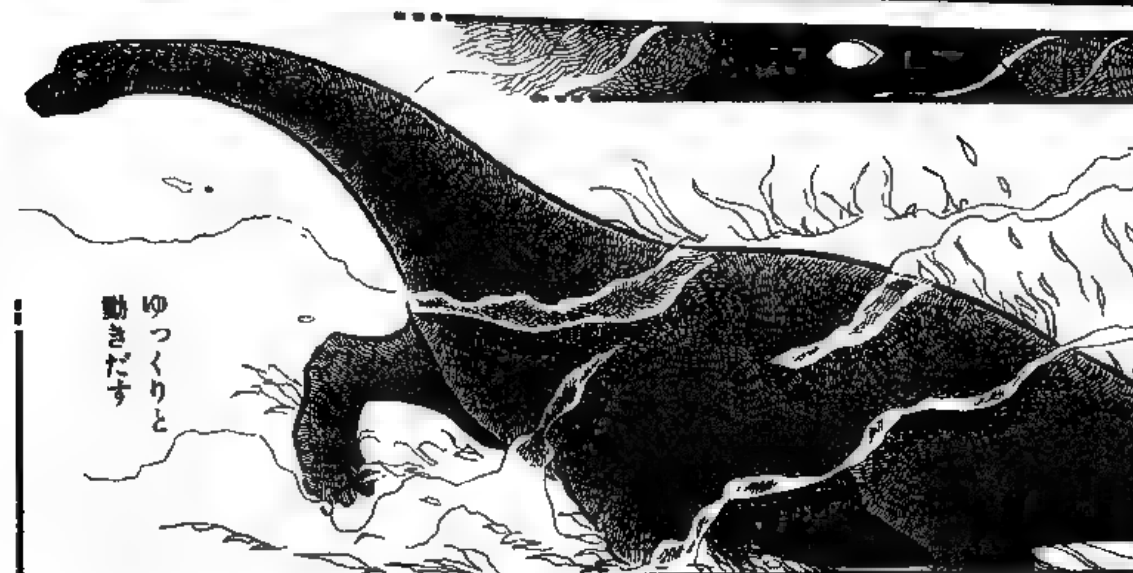
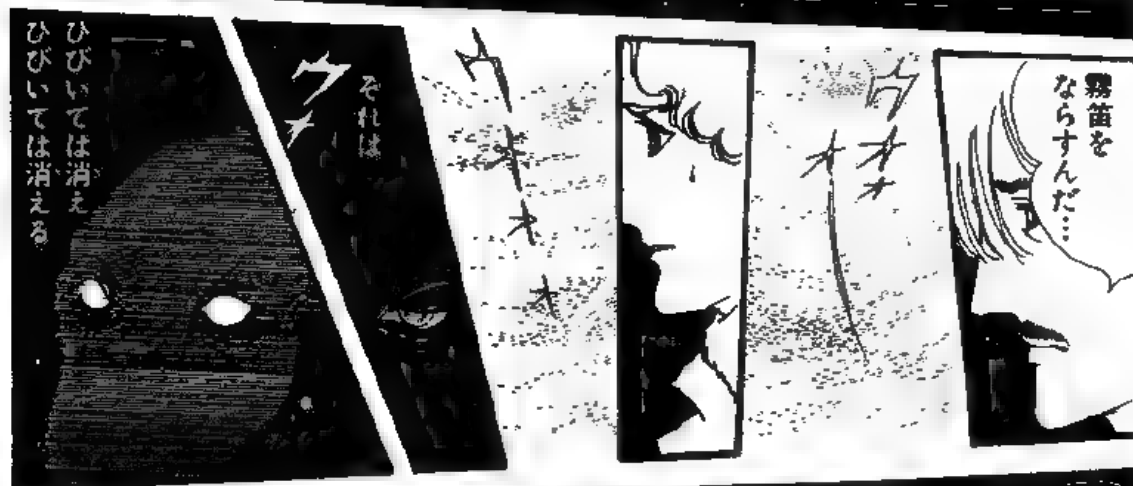














あとどれほどの
時間が必要
ものか

水圧に体を
ならしながら
すこしずつ
すこしずつ
上昇する



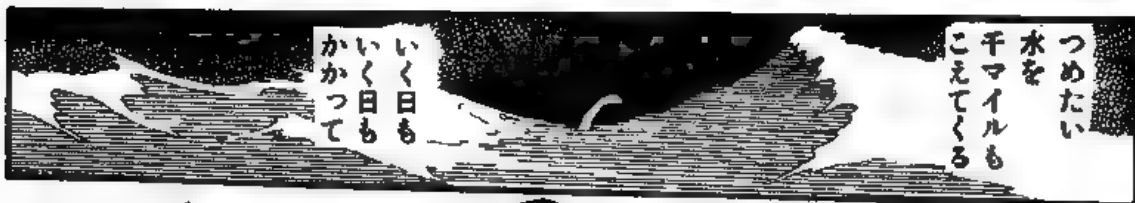
海面に
やっと出て
その上



3か月ほども
かかるだろう



上へへんに
上がらな
体かはれつして
しまうからね

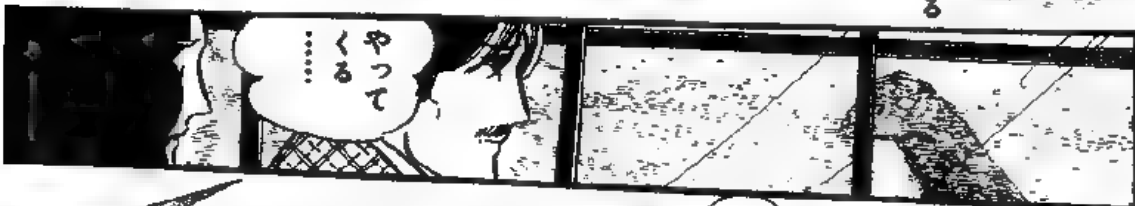


つめたい
水を
千マイルも
こえてくる

いく日も
いく日も
かかって



そして
やっと
やってくる

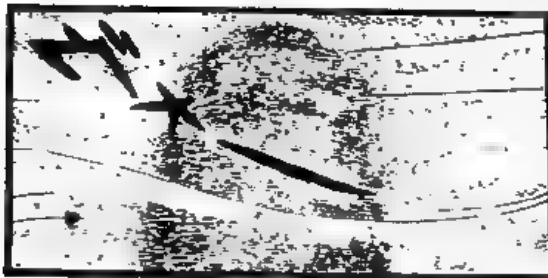


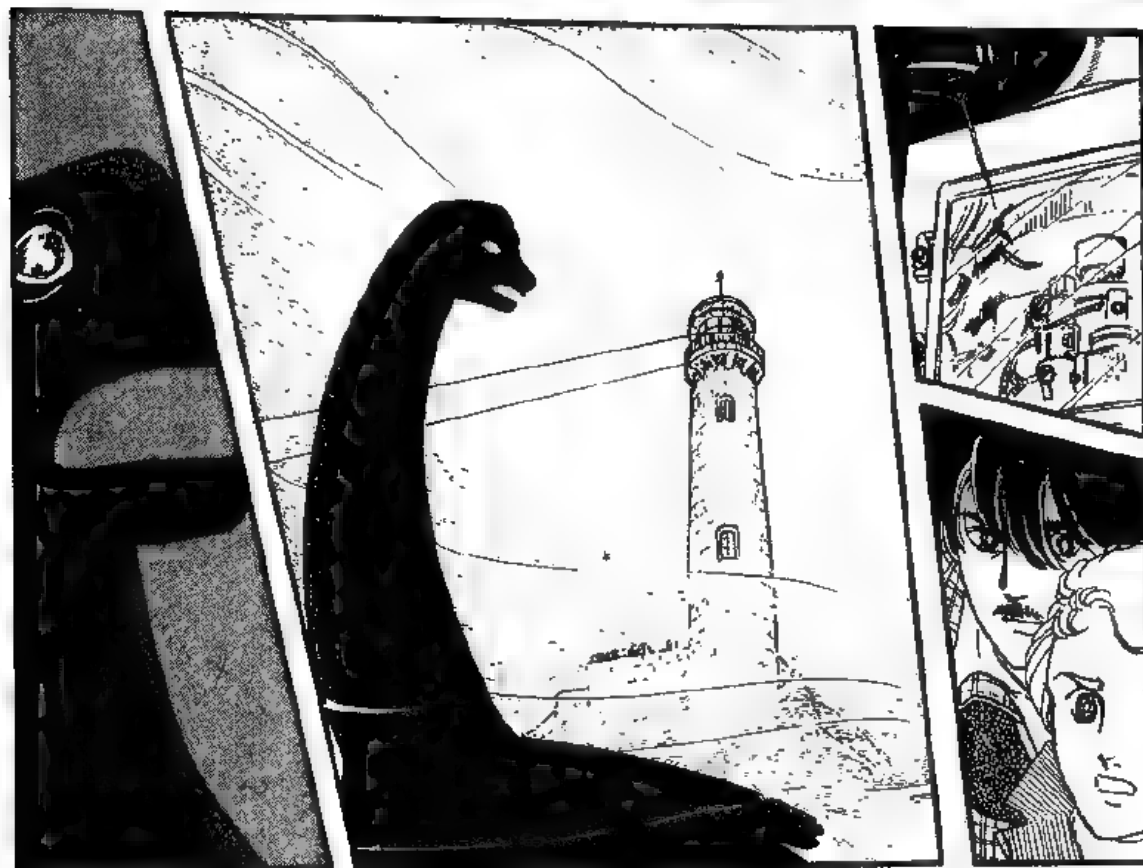
やっ
て
くる
……

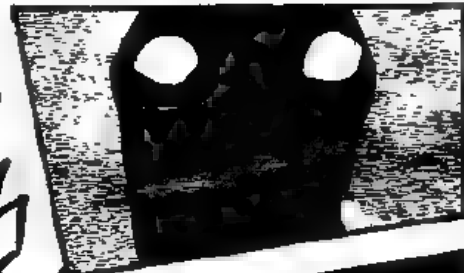
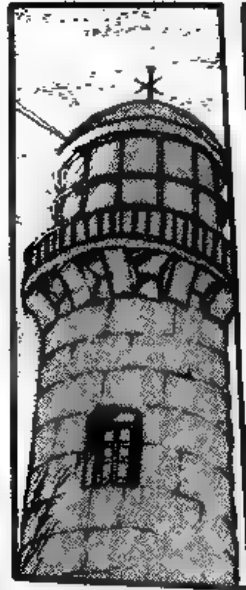
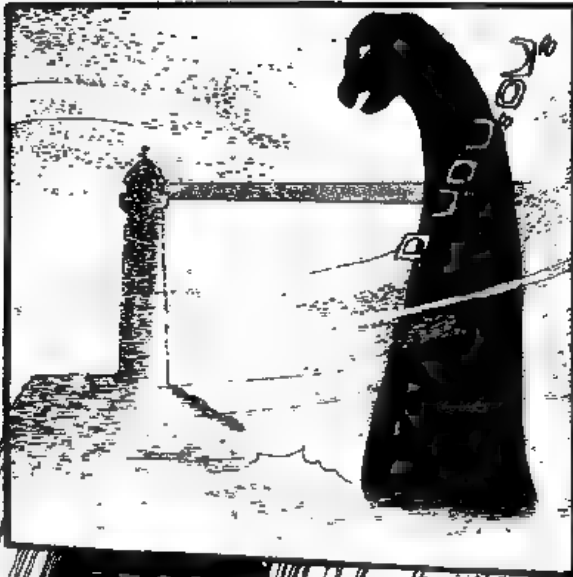


……あれは
まっていたんだ

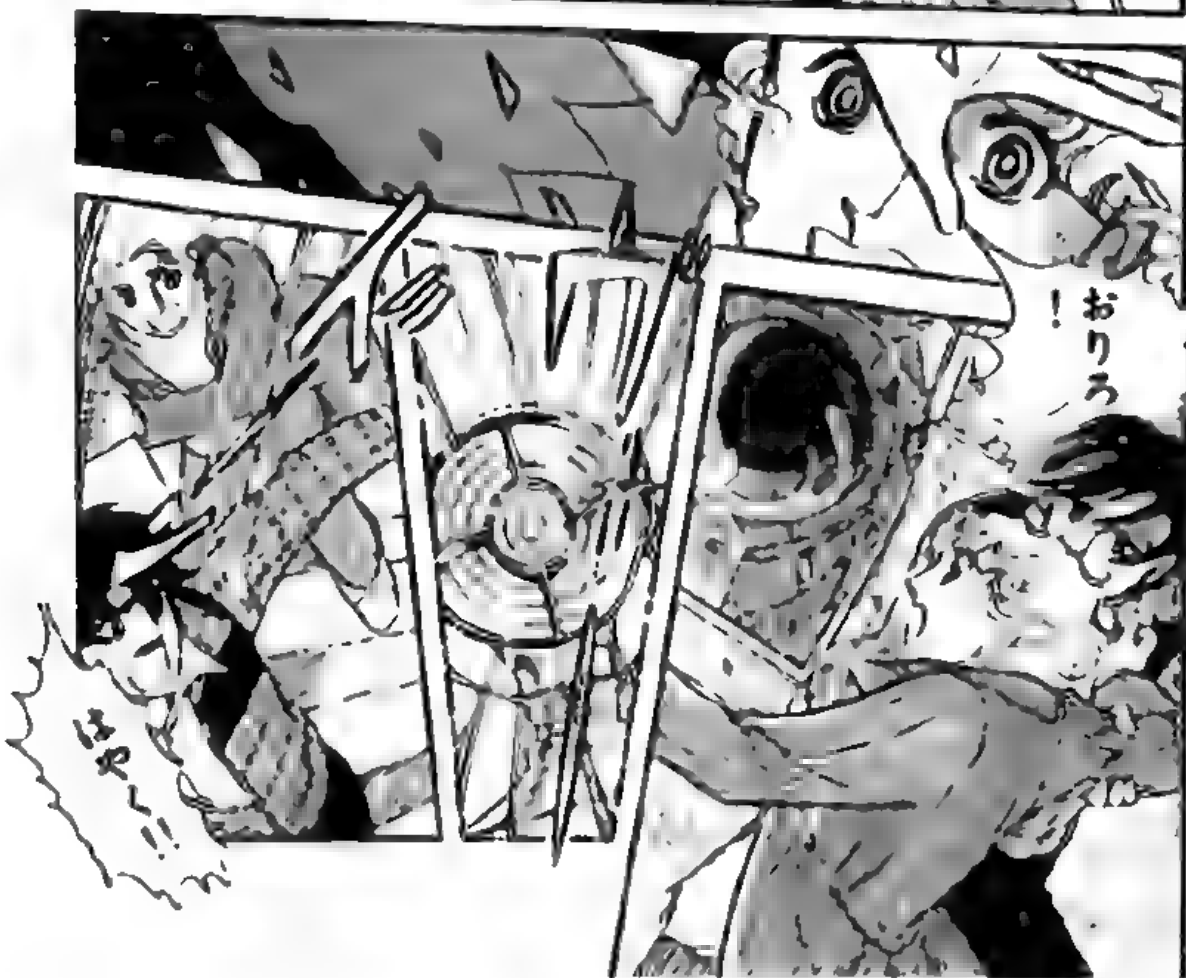
なんと
長い間

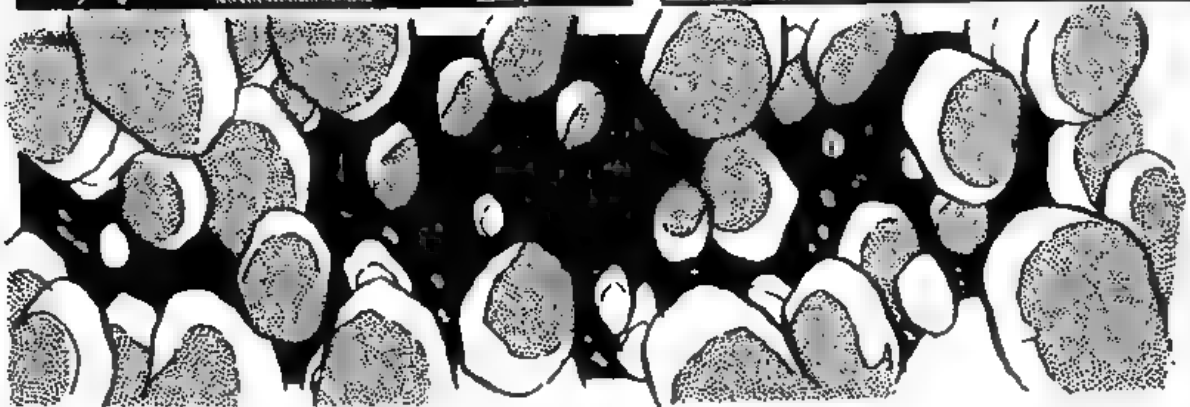




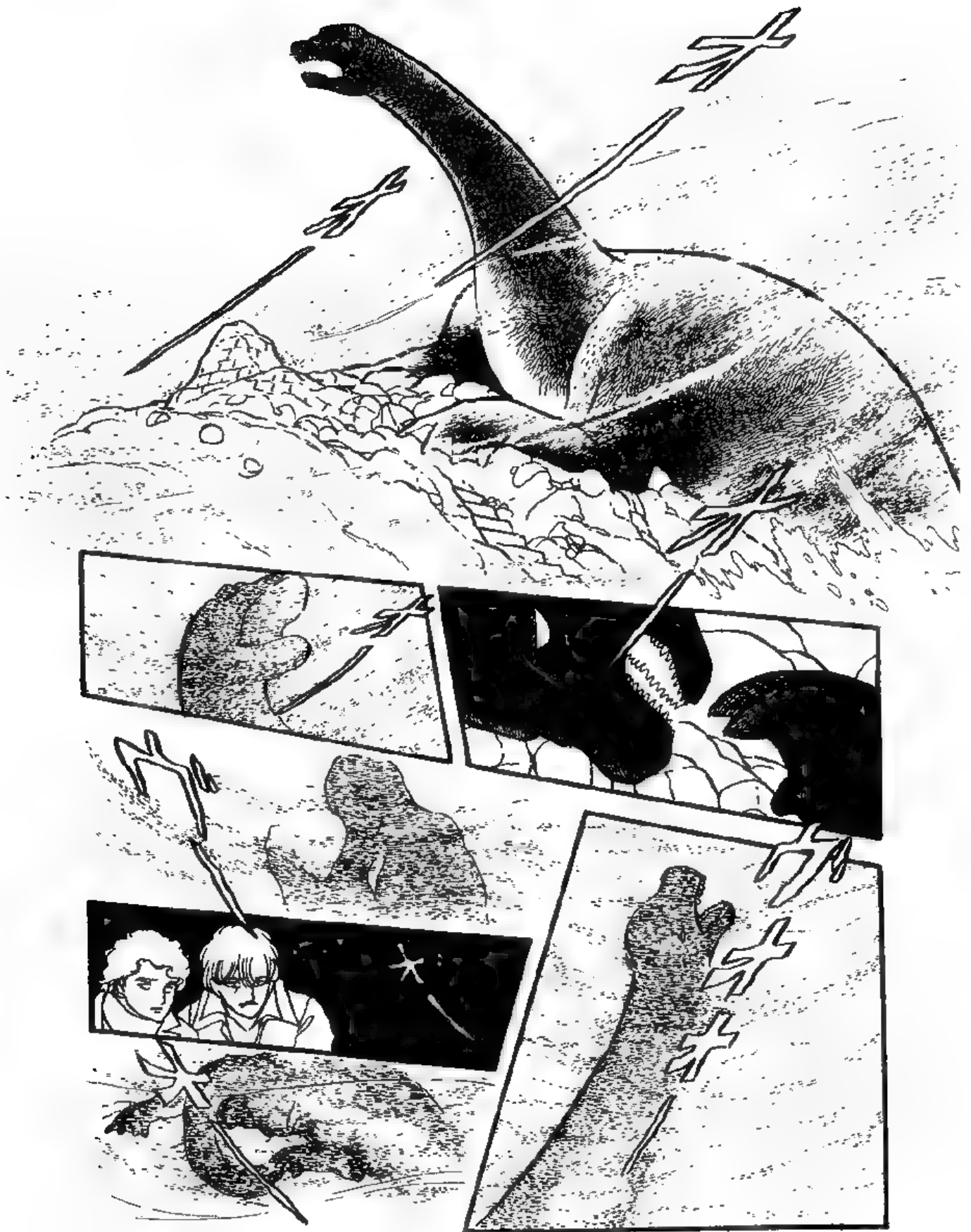


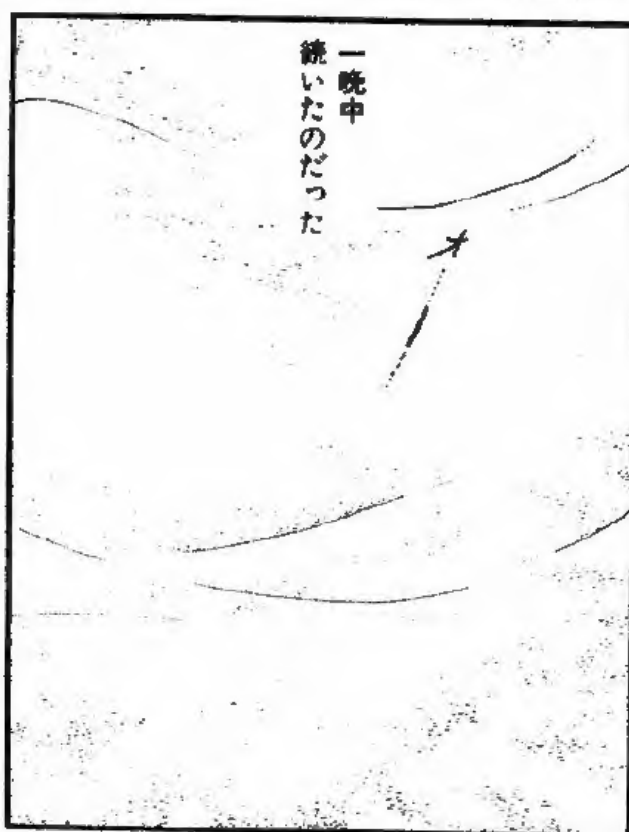
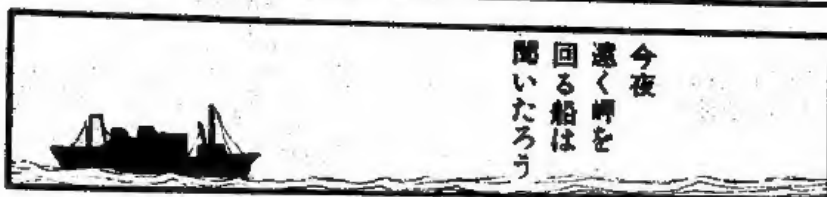




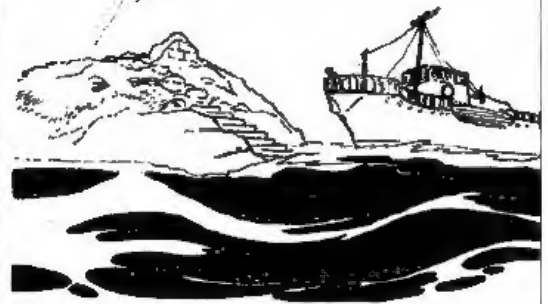




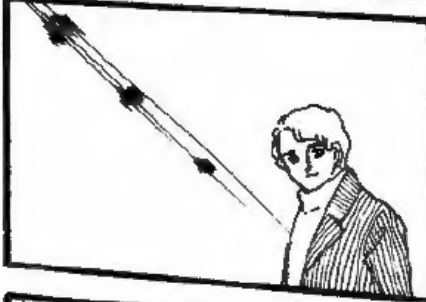




翌日の午後には
救援隊がきて
地下室からほくらを
救いだしてくれた



ただ二度三度
高波がぶつかって
それでボロッと
くずれちまってる



次の年
新しい灯台が建てられた



マックダン!



こんどの灯台は
鉄筋コンクリート造りさ
また責任者になったよ



万一にそなえてな



ところで
結婚したって?
いいことだ



ええ!







人間が
この世に

